

5days Side Story

佐野凧未

登場人物

- ・高野 了 (20) …大学の清掃員。若くして働いている。
- ・長谷川 宏太 (20) …大学3年生。ヒップホップな外見。バスケットが好き。
- ・吉本 雅樹 (20) …宏太の友人。無口。バスケット仲間。
- ・小田 圭二 (19) …宏太の後輩。お調子者。バスケット仲間。

- ・河瀬 司 (20) …大学3年生。不思議系女子。

- ・松本さん …了の仕事仲間。おじさん。
- ・かおり …司の友人
- ・ダンス自主練少年

その他エキストラ

○了の家・ソファ or ベッド・朝

鳴り響く目覚まし時計。

高野了（20）、枕にうつ伏せになって寝ている。

了、目覚ましを止めて、目を擦りながらも淡々と起き上がる。

○同・台所

シンクに向かって歩くと了。

蛇口を上げて、水を出す。

シンクの隣に置いてあったコップを手に取り、水を汲む。

気泡を立てながらコップいっぱいに入る水。

了、流水を止め、コップの水を一気飲みする。

空になったコップをシンク隣の調理台に勢いよく置く。（→了のスイッチオン！）

<手元から上にカメラ移動>

目が醒めている了の顔。

テロップ：「Monday」 / →ブラックアウト

○同・リビング・小さな台の前

了、朝の準備（着替えなど）を終え、台の前でしゃがみ込む。

台の上には、肩を組みながら微笑んでいる、父と了の写真。

台の上に置かれていた腕時計（写真で父がしているもの）を手に取り、左腕につける。

了、目を瞑って合掌する。

了 「行ってきます。」

鼻を一回摩って立ち上がり、玄関へ向かう。

了のリュックには、バスケットボールのキーホルダーがついている。

○大学・体育館・朝

ドリブルされているバスケットボール。

長谷川宏太（20）、一人でバスケットをしている。

レイアップを決めた後、スリーポイントのエリア、ゴールに対して正面の位置に行く。

スリーを狙うも、ゴールにはじかれる。

宏太、一度ため息をつき、頭をひと掻きする。

○同大学・スカイウェイ（昼前）

学生たちが話しながら歩いてくる。

了、談笑する学生を横目に、1人黙々と掃除機をかける。
了、掃除を終え、掃除機を片付ける。／→フェードアウト

○同・3年アトリエ

了、ごみ収集カートを押しながらアトリエに入っていく。
ゴミが溜まった袋の口を結んで、回収する。

↓ワイプ

○コンピューター室

↓

○デザイン実習室

↓

○4年空間アトリエ

↓

○トイレ横

↓

○C-102

了、同じように回収する。

○同・スカイウェイ

了、ゴミが溜まったカートを押しながら、実習室方面へ歩いている。

とあるものを見つけて、窓側に近く。

了の目線の先には、スカイウェイの窓から見える学生課の軒下で、一人ダンスを自主練する男子学生の姿。

了、軽く微笑み、再びカートを押して歩いて行く。

○同・C-301 教室

了、ごみ収集カートを押しながら教室に入ってくる。

入り口から3メートルほど中に入った所にあるゴミ箱まで直行する。

いつものようにゴミを回収しようと、ゴミ袋に手を掛けたところで動きが止まる。

了、教室側を振り向く。

そこには、他に誰もいないのに、一人土下座のようなことをしている河瀬司（20）の姿。

了、驚き戸惑うも、ゴミをまとめ、なるべく気配を消すようにして出て行く。

○同・C棟 階段向かいの談話室

了、カートを押してやって来る。

さっき見た変な人に意識が持っていかれ、眉毛が八の字になっている。

ゴミ箱へ直行し、ゴミ袋に手をかけ用とすると、燃えるゴミにペットボトルが捨てられているのに気づく。

了、ペットボトルを拾い、ラベルとキャップを分別して、正しく捨てる。

改めて、ゴミを収集しようとする。

(ゴミ箱の中には、食べ終わったカレーの容器が)

すると、次は、そのゴミ箱の中に琥珀色の宝石が付いた指輪を見つける。

了 「え？」

了、指輪を拾って、まじまじと、いぶかしげに見つめる。

テロップ：タイトル「5 days Side Story」

○同・体育館

ゴールを弾くバスケのゴールリング。

宏太 (O.S.) 「あー、もう。」

宏太、吉本雅樹 (20)、小田圭二 (19)、3人でバスケをしている。

宏太、スリーポイントシュートが外れてイライラしている。

宏太 「ぜんっぜん入んねーなあ！」

圭二 「まあまあ、そういう日もありますって。」

雅樹、宏太の外したおこぼれボールで、レイアップシュートを軽々と決める。

圭二 「ちょっと俺もやっていっすか？」

圭二、雅樹からパスをもらい、宏太のそばからスリーを放つ。

綺麗に決まるシュート。

圭二 「キター—————！！！！え！？まじやばくないっすか今の！」

宏太、露骨に嫌な顔をする。

圭二 「え、一発！うわ、フォー—————！！」

宏太 「ちょっと、まさ！パスパス。」

宏太、ボールを拾って適当にドリブルしていた雅樹に声をかけ、パスをもらう。

宏太 「絶対入れてやる。」

宏太に注目する、圭二と雅樹。

宏太、ボールに全集中し、魂のスリーを放つ。

やはり入らないシュート。

宏太 「ぬわー！！」

宏太、膝から崩れ落ちる。

雅樹、含み笑う。

圭二 「(ちょっと嬉しそうに) 先輩、今日もうきっとダメっすわ。もうやめましょ??」

宏太 「くそー!! いや待って、まだいける、まだいける。」

圭二 「帰っていつすか？」

宏太 「だめ。」

○同・スカイウェイ先端 エレベーター前

了、指輪をまじまじと見つめながらエレベーターを待っている。

チンツというエレベーターの到着音で指輪を素早くポケットに入れ、ごみ収集カートを押して乗り込む。

○同・1階エントランス

了、エレベーターから降りて来る。

カートを体育館前の階段の脇にとめ、身一つで階段を軽々と降りる。

体育館の扉を開ける(引き戸)と、入り口に一番近いバスケットゴールを使って、遊んでいる学生3人が。(宏太、雅樹、圭二)

了、気配を消して中へ入る。

○同・体育館

プレーのキリがついた宏太、雅樹、圭二、休憩に入る。

雅樹と圭二、壁際の荷物の元に座り込み、ペットボトル飲料をガブ飲みする。

宏太、立ったまま水を一口飲み、すぐにコートへ戻る。

ボールを拾い、誰にも聞こえない程度の声で呟く。

宏太 「今度こそは絶対決める。」

宏太、一呼吸おいてから丁寧にスリーを放つ。

綺麗に決まるシュート。

宏太 「…っ!! しゃいあーーーー!!!」

宏太、すぐに雅樹と圭二のもとを指差して、アピールする。

雅樹と圭二、二人で一つの携帯を覗き、何やら笑っている。

絶望する宏太。

宏太 「え!? おい!!!」

雅&圭、ん？と顔を上げる。

宏太 「え、嘘でしょ？見てなかったの？決めたって、今！今入ったの！」

雅&圭 「……え〜い（またまた〜）。」

宏太、ショックで言葉に詰まり、ジーザスな感情を表すジェスチャーだけが大きくなる。

雅&圭、既に携帯に夢中になり、爆笑している。

宏太 「まじかよ…。」

宏太、諦めたように雅&圭から視線を外したところで、入り口方面を見る。

誰かが出て行った様子 of 扉。（人影と扉の残像）

○同・ロッカールーム

人の気配がないロッカールーム。

電気が付く。

了、明るい表情で入って来る。

ふ〜と一息ついて、首にかけていたタオルを外し、自分のロッカーの前に立つ。

一瞬ぼーっとすると、いきなり手に持ったタオルをボールに見立て、シュートのフォームを真似る。

そして、一人で照れながら鼻を触り、ロッカーを開ける。

了、ロッカーの中を見て、すうっとテンションが戻る。

ロッカーの真ん中に、缶コーヒーが置いてある。

了、鼻からため息を吐いた後、缶コーヒーのそばに付箋を見つけ、取って読む。

付箋 『夜番代わってくれてありがとう。すみませんが、宜しくお願いします。コーヒーはいつものだけども、すまんね。 松本』（おじさんの字）

了、奥からペットボトルの水を取り出し、ロッカーを閉める。

○同・校内・夜

昼間とは対照的に人の気配がなく、静まり返っている校舎。

了、暗い校舎の中で懐中電灯を揺らしながら歩いている。

- ・教室の中
- ・トイレの入り口と中
- ・体育館
- ・階段など

事務的に電灯で照らしながらチェックしている。

○同・映像編集室前・夜

了、他の教室と同様にチェックにやって来る。

映像編集室の中を、懐中電灯で、扉の小窓から軽く照らし、何事もなく通り過ぎる。

が、何かに気づき、後退りして再び小窓から覗く。

了、扉を恐る恐る開けて中に入る。

○同・映像編集室内・夜

了、部屋の中を照らしながら確認する。

部屋の中央に来たところで、無防備に放られているリュックを見つける。(小窓から見つけたもの)

了 「え？」

了、リュックを調べる。

その背後、入り口扉の小窓に映る人影。

ガラガラッと急に扉が開く。

了、驚き、振り返る。

そこにいたのは宏太。

宏太、部屋の電気をつけ、了をまるで不審者を見るかのような目で見つめる。

宏太 「…え、何してるんですか？」

了、すぐに立ち上がる。

了 「いや、あなたこそ何してるんですか？ もう施錠時間ですけど…。」

宏太 「え？…あー！びっくりした、いやまじ今泥棒かと思って、すいません。」

了、面食らい、決まり悪そうに、咄嗟にリュックを指差す。

了 「こ、これあなたのですか？」

宏太 「あ！そうっす、そうっす。」

宏太、ズカズカと了のそばまで歩いて来る。

宏太 「これ俺のっす、はい。」

宏太、ただ了の隣に来ただけで、帰る素振りを見せない。

気まずい沈黙が流れる。

了 「…え？ え、あの、施錠時間です。」

宏太 「あ、はい。わかりました。」

宏太、依然として帰る素振りを見せない。

了 「…え、え？ あの帰らないんですか？」

宏太、一瞬目を泳がせ～

宏太 「あ、いや、そうっすよね。帰ったほうがいいですよね？」

了、宏太をまるで不審者を見るかのような目で見ると。

宏太、困ったように頭を掻く。

宏太 「…あの一、今日学校に泊まることってできませんか？」

了 「…はい？」

宏太 「あ、今日、学校に泊まることできませんか？」(先程よりゆっくりと)

了 「…いや、聞こえてます。いや、ダメでしょう。」

宏太 「そこをなんとか！」

了 「え？いや、僕がどうこうできることじゃないので…。」

宏太 「お願いします！！」

了、大困惑し、瞬きが通常の2倍になる。

了 「え？え？え、何ですか？なんで、なんで学校に泊まらなきゃいけないんですか？」

宏太 「え、あ一。…家？が、無い、というか。いや、あるんですけど、今日、帰れる家が無い、みたいな？ はい。」

了 「ええ…？」

了、困惑し、慌てふためく。

宏太、了の困惑ぶりを見て、観念する。

宏太 「…いや！すいません！迷惑っすよね、帰ります！」

宏太、リュックを背負い、極まり悪そうに苦笑いして了に会釈する。

宏太 「ほんと、なんか、すいません。…じゃあ、はい、お疲れ様です。」

了 「…。」

了、眉をしかめながら、ぎこちなく会釈を返す。(自身の良心から、このまま返して大丈夫なのか葛藤している)

了、落ち着かない様子。

宏太 (O.S.) 「あ！」

了、宏太の声に反応する。

宏太、扉の前まで行ったが、ゆっくりと振り返る。

宏太 「……あの一、お宅に泊めていただくことはできませんか…？」

了、フリーズ。

宏太、困っているような、微笑んでいるような、憎めない顔で了を見ている。

○了の家・リビング・夜

ドアの開く音。

了、部屋に帰って来る。

宏太、了の後ろに続いて入って来る。

宏太 「お邪魔しまーす。」

宏太、部屋に入るなり、キョロキョロしている。

了、リュックを壁際の床に置く。

宏太、了のリュックを二度見する。【* 1】

了 「どうぞ、適当に荷物とか置いてもらって大丈夫なので。」

宏太 「あ、はい。」

宏太、

リュックを下ろし、入り口付近の床に腰掛ける。

了、台所へ手を洗いに行く。

宏太、部屋を観察する。

全然ものが少ない部屋。

ただレンタルスペースかのように一定の家具家電は備えられている。

宏太、リビングテーブルに並べられた 10 本程度の缶コーヒーに目が止まる。

了 (O.S.) 「社宅なんで～」

宏太、急なこえに驚きながら、了を振り向く。

了、手洗いから帰ってきており、そのまま立ちながら話す。

了 「来たばかりの社宅なんで、もの少ないんです。」

宏太 「ああ。(納得したようなしてないような生返事)」

宏太、意識は再び缶コーヒーへ。

宏太 「あの、あれなんですか？(コーヒーを指す)」

了 「え？あ…コーヒーです。」

宏太 「あ。なんで、あんな沢山あるんですか？」

了、宏太を一瞥し、決まる悪そうに答える。

了 「あー…。職場のおじさんがよく差し入れてくれるんですけど、…俺飲めなくて。」

宏太 「え、飲めないんですって言わないんですか？」

了 「ああ、言ったほうがいいとはわかってるんですけど…。」

了、申し訳なさそうに苦笑いする。

宏太 「まあ、言いづらいか(笑)、じゃあ、一本もらってもいいですか？」

了 「え！あ、全然(どうぞ)。むしろ全部もらって欲しいくらいで。」

宏太 「え！まじすか！やったあ。」

宏太、立ち上がり、リュックを持ってコーヒのもとへ行く。

了、ずっと話していたその場に座る。

宏太 「え、まじでいいんですか？」

了 「どうぞ、どうぞ。」

宏太、嬉しそうにリュックにコーヒーを詰める。

宏太 「あ、そうだ。」

宏太、手を止める。

宏太 「俺が学校に泊まろうとしたこと、誰にも言わないでください。」

了 「……あ、…はい。」

宏太、コーヒーを再び詰め始める。／→ブラックアウト

○同・朝

目覚ましの音が鳴り響いている。

了、うつ伏せになって寝ている。

テロップ：「Tuesday」

了、目覚ましを止めて、目を擦って上半身を起こす。

ぼーっとした頭で、部屋を見渡すと、宏太が既になくなっていてる。

了、テーブルの上の置き手紙に気づき、起き上がって、手に取る。

手紙 『まじで助かった、ありがとう。 長谷川宏太』

○大学・アトリエ・朝

人の気配がない朝のアトリエ。心地よい朝日が入っている。

宏太、昨日の服装のままアトリエのソファで豪快に、死んだように寝ている。

宏太のリュックがそばに放り出されている。

○了の部屋・朝

缶コーヒーがなくなって、広くなったテーブル、置き手紙だけが残っている。

了、朝の準備を終え、一冊のノートブックとシャーペンを持って、テーブルのもとに座る。

ノートを開き、新しいページ（ノートの1/3あたり）を開く。

了、昨日の出来事を記入する。

ノート 『7/8（月）変な人をうちに泊めた。 学校に泊まろうとしてた。 コーヒーをもらってくれた。 長谷川宏太というらしい。』

ここまで書いて手が止まり、ペンをクルクル回す。

了、一枚めくって、前のページを見る。

ノート 『7/4（木）星座占い12位。 たしかに寝違えてた。 人のチャリをベンチ代わりにするおじさん発見。 今日もダンス君通常運転。』

『7/5（金）コーヒー10本目突破。 飲めない。 雨で靴下染みた。 ダンス君雨でも元気。』

『7/6（土）休み。寝てた。』

『7/7（日）今日も寝てた。けど30分散歩した。道路にビーサン片足だけ落ちていた。』

了、ダンス君の文字を見て、ハッとする。

ページを戻し、7/8（月）の項目に書き足す。

ノート 『ダンス君通常運転。』

了、学校で何があったか思い出そうと、ペンをクルクル回す。

了、思い出し、書き足す。

ノート 『土下座している人初めて見た。』

『ごみ箱の中から指輪を拾った。』

了、ペンを回しながら、拾った指輪の行方を思い出す。

昨日宏太が来たときに放って置いてから動いていないリュックのもとへ行き、中を探す。

リュックの小ポケットから見つかる指輪。

了、拾った時と同じように、指輪をまじまじと見る。（何故か惹かれる）

○大学・学食ルーム（クローバーホール）・昼

カップラーメンを啜る、宏太、雅樹、圭二の口元。

ソファ席に雅樹と圭二（雅樹の左隣）が、圭二の向かいに宏太が座って、まさに男子大学生という勢いでラーメンを啜る。

テーブルには、缶コーヒーが5本、無秩序に置かれている。

圭二、麺を口に運ぼうとしてした時、宏太越しに何かを見て、動きが止まる。

目線の先には、手で欧風カレーを食べている司の姿。

圭二、口元まで持って行った箸を下ろす。

圭二 「…え？…え？え？ え、怖い怖い怖い怖い。」

圭二、視線は司に奪われながらも、隣の雅樹にすがって、司の方を指示する。

圭二 「ちょっ、あれ、見てくださいよ。」

雅樹、顔を少しだけ上げて、気怠そうに司の方を見る。

司、人目を気にせず、美味しそうに手でカレーを食べている。（司の向かいには友人座っている、一人ではない）

雅&圭、司に見入る。

圭二 「やばいやつじゃん。えなに？なんで手で食ってんの？なんで？ …え、てか、…ナン食えよ。手で食うならナン食えよ。ナンでナンじゃ…、ナンもナンで何でナンじゃ～<バシッ！>」

圭二、言葉を遮るように、宏太に叩かれる。

宏太 「うるさい。」

圭二 「いやいや、ちょっと待ってくださいよ、ちょ、見てください、あの人。あの人がばくないっすか？」

宏太、圭二の指示した方を振り向く。

司、手でカレーを堪能している。

宏太、ただ見つめる。

司、カレー堪能中。

宏太、一瞬鼻がピクッと膨らみ、素早く元の姿勢に戻る。

圭二、ちょうど集中してカップ麺を食べている。(司の方を見ていない)

宏太、いきなり圭二の頭を再び叩く。

宏太 「あんまり見んな。」

圭二、驚き、衝撃でむせながら顔を上げる。

圭二 「…ゴホッゴホ…ええ??？」

圭二、ナンで叩かれたん!?という思いで雅樹にすぎると、

雅樹、依然として司を凝視している。

圭二、叩くならこっち(雅樹)だろ!と言わんばかりに雅樹を指差して、宏太にアピールする。

宏太、圭二を無視して、先程よりも勢いよくカップ麺に食らいつく。／→ブラックアウト

○同・H棟 廊下

了、脚立に登り、廊下の蛍光灯をいじっている。

作業が終わり、脚立を降りて、時間を確認する。

腕時計、16時14分を指す。

了、脚立を持っていく。／→フレームアウト

○同・学生課前～スカイウェイ

了、首を回したり、肩を回したりしながら、気怠そうに歩く。

了、ダンス君が見えるスポットで立ち止まる。

ダンス君、いつも通り軒下で自主練している。

了、しばらく見た後、エントランス方面へ歩き出す。

<左にパンする>

宏太、雅樹、圭二、A棟側から曲がって来る。

他の学生もチラホラ歩いている。

圭二 「まじ韓国語、俺イケる気がするんすよね。てかネイティブまでなれる気がする。いや、ほんと KPOP 聴いてて良かったっすよ、まじで、チンチャ。」

宏太 「…せいぜい落単しないように頑張れー。」

圭二 「いや今回ガチです、まじで。チンチャ。」

宏太 「それしか言わねえじゃん。」

圭二 「ちょっ、なんかお題くださいよ、韓国語で返しますんで。」

雅樹 「ありがとう。」

圭二 「カムサハムニダー。なめないでください？」

雅樹 「ごめん。」

圭二 「大丈夫っす。」

雅樹 「ごめん。」

圭二 「……ん、あ、お題?? あ。ごめん、ミヤネー！ はいはい。」

宏太 「たばこ。」

圭二 「…たばこ？」

雅樹 「タンベ。」

圭二 「え？」

宏太 「買う」

圭二 「…か、買う…。」

雅樹 「サダ。」

圭二 「ええ??」

宏太 「たばこ買って来い。」

雅樹 「タンベル サジャ。」

宏太と雅樹、立ち止まり、圭二の方を真顔で向く。

圭二 「…ええ？ な、え…どうもすみませんでしたあ。」

宏太と雅樹、依然として圭二を見つめる。

圭二 「え、あ、マジっすか、まじの方のバシリですか？」

宏太、再び歩き出す。

宏太 「…嘘だよ。俺今日コンビニ寄って帰るし。」

雅&圭、取り残され、突っ立っている。

圭二 「え、あ、え？ バスケやらないんすか？」

宏太、振り返って答える。

宏太 「今日俺行くところあるから。」

宏太、去っていく。

圭二 「えー！」

雅樹 「チンチャー？」

圭二 「あっ。(雅樹にチンチャを使われたことに反応する) え、もしかして韓国の方ですか。(おふざけで茶化すように)」

雅樹 「チョヌン イルボンサラミセヨ。」

圭二 「えっ、え、まじっすか？」

雅樹 「ネー。」

圭二 「ええ！まじか！！え！初めて知ったんですけど！雅樹さん！！すごっ！」

雅樹、歩き出しながら答える。

雅樹 「ネー。チョヌン イルボンサラミセヨ。(私は日本人です)」

圭二、テンション上がりながら雅樹についてゆく。

圭二 「えー！まじかー！」

○同・ロッカールーム・夕方

了、首をポキポキさせながら、気怠そうに入って来る。

ロッカーを開けると、そこには缶コーヒーが。

○了のマンションの前・夕方～夜

了、缶コーヒーを片手に持って歩いて帰ってくる。

仕事終わりの疲れた表情。

了、マンションの前で両膝に腕を乗せた形でしゃがみ込み、頭を垂れている宏太を見つける。

了 「…え、長谷川君？」

宏太、立ち上がり、手を挙げて応える。

宏太 「おお！お疲れーい。」

了 「え…っと…」

宏太、ズカズカと了のそばまで歩いてくる。

ポケットから紙パックのイチゴミルクを了に差し出す。

宏太 「はい、きっと好きでしょ。」

了 「…え、…うん、え、なんで？ 言ったっけ？」

宏太 「まじ？やったあ！ いや、全然勘(笑)。昨日泊めてもらったお礼。」

了 「ああ…。(納得) ありがとう。」

了、イチゴミルクを両手で受け取る。

宏太、満足そうな表情。

宏太 「じゃあ。(帰ろうとする)」

了 「え？それだけ？」

宏太 「え？うん。(立ち止まる) …あ、そうだ！今度一緒にバスケしようぜ。」

了 「…え？」

宏太 「バスケ好きでしょ。」【* 1】

了 「…え、なんで。」

宏太 「え…。勘？」

了、意外な宏太の発言に戸惑い、瞬きが多くなる。

宏太 「まあ、俺らいつも4時ぐらいからずっとバスケしてっから、気向いたら来てよ。」

了 「え…いいの？」

宏太 「うん。んじゃ。」

宏太、手を上げて了が来た方へ去っていく。頭を一掻きする。

了、宏太を目で追う。

了、落ち着いて、自分も家に入ろうと振り返った後ろ姿、バスケットボールのキーホルダーが揺れている。【* 1】

○了の部屋・夜

了、日記の新しいページを開く。

部屋着になり、いつものようにテーブルで日記を書き出す。

ノート 『7/9 (火) バスケットに誘われた。イチゴミルクもらった。』

ここまで書いて、手が止まる。

了、ペンをクルクル回す。

了、書き足す。

ノート 『ダンス君健在。』

了、『バスケットに誘われた。』に目を落とし、少し考えてから、ぐりぐりと円で囲む。／→ブラックアウト

○大学・ロッカールーム・15時くらい

ロッカーが開く。<ロッカー目線>

仕事終わりの了、ロッカーを見るなり、びっくりする。

ロッカーの中に入っていたのは、缶コーヒーではなく、豆大福。

了、手に取る。

テロップ：「Wednesday」

了、笑がこぼれる。

了 「え… (嬉しい)。』

了、上機嫌そうに作業服を脱ぎ出す。

○同・スカイウェイ・夕方

16時5分を指す、了の腕時計。

了、私服に着替えており、ソワソワしながら歩いている。

一点を見つめたかと思えば、再び時計を確認し、歩いていく。(バスケに行くかの葛藤)

○同・体育館前・夕方

了、体育館の入り口までやってきたが、扉を開けるのを躊躇っている。

腕時計をつけた左手首を右手でギュッと握りしめている。

了、一度扉から離れるも、また戻ってくる。

意を決して扉を開き(引き戸)、中を覗くと、体育館には誰もいない。

了、安堵の表情を浮かべる。

扉を閉め、体育館を後にしようとする〜

宏太(O.S.) 「何してんの？」

了、驚き、振り返ると、宏太、雅樹、圭二の姿。

雅樹、了を凝視し、

圭二、了に軽く会釈する。

宏太 「入らないの？バスケしよーぜ。」

了 「…う、…うう(うん、なのか、ううん、なのか分からない返事)。」

宏太、何の気なしに体育館へ入る。

雅&圭、続いて入る。

了、意を決して入る。

○同・体育館内・夕方

宏&了 vs 雅&圭でバスケをしている。

爽やかで疾走感がある。

了、初めは戸惑い、動きが固かったものの、徐々にほぐれていく。

接戦。互いに点を入れては喜び合う。

ハイタッチする雅&圭。

了のアシストからシュートを決める宏太。

ナイス！と声をかける宏太。

シュートが決まって大袈裟にリアクションする圭二。

シュートを決めてもリアクションが薄すぎる雅樹。

ハイタッチする宏&了。

シュートを決める了。

了の清々しい表情。／→バスケシーン終了

了、圭二、雅樹、この順で壁際に座っている。

宏太、了の隣にやって来る。

宏太 「どわー、疲れたー。」

了、ペットボトル水を飲む。

宏太、自分のリュックの中の飲み物を探す。

宏太 「うわ、待って。最悪だ。あー、ちょっと飲みもん買ってくるわ。」

宏太、足早に出ていく。

圭二 「いってらっしゃーい。」

圭二、了の様子を伺う。

圭二 「見ました？俺の2本目のシュート。まじで綺麗に入ったと思いませんか？」

了 「…う、うん、すごい上手いんだね。」

圭二 「俺別にバスケ部じゃないんですけど、高校の時とか。でも、好きでよくやってたんで、割とできるんすよね。うっす。(会釈)」

了、苦笑しながら、頷く。

圭二 「高野さん、なんかスポーツとかやりました？高校の時の部活とか。」

了 「いや…帰宅部(苦笑)。ずっとバイトしてたから…。でもバスケはずっと好きで。」

圭二 「え、かけえ(適当)。バイトは何してたんすか？」

了 「…えっと、清掃とか、ガソリンスタンドとか、コンビニとか？」

圭二 「うわ！え、すごいっすね。めっちゃやってるじゃないですか！ いや、俺もバイトしなきゃなあー！」

了、苦笑して水を飲む。

圭二 「あ、てか高野さん、3年生ですか？ゼミどこっすか？」

了、面食らう。水をこぼしそうになる。

雅樹、初めて了の方に顔を向ける。

了 「…いやあ…。」

了、大学生ではないと言いかけるも、やめる。

了 「…違う、大学なんだよね…。」

圭二、驚き、

雅樹、無表情。

圭二 「え！そうなんすか！いや、だからか！ すんません、あんまり見たことない気がして。え、どこ大ですか？」

了 「…えっと…」

雅樹 「タンベ。」

圭二 「…ふーん、タンベ大学ー…って、」

圭二、雅樹の方を向く。

圭二 「はい？」

雅樹、圭二の目を澄んだ目で見つめる。

雅樹 「圭二、タンベル サジャ（たばこ買って来い）。」

圭二 「うわ、でた。」

圭二、即座に了の方を振り向き、了に同情を求める。

圭二 「意味わかんないでしょうこの人。これ韓国語でたばこ買って来いって意味なんすよ、どう思います？」

了 「はあ。」

宏太、体育館に戻ってくる。

宏太 「ただいまー。」

圭二 「あ、おかえりなさいーい。」

宏太の手には炭酸飲料。

宏太と雅樹と圭二、何やら炭酸しか売ってなかったあの、小言を言い合う。(アドリブ)

了、飲み物を一口飲んだ後、一瞬暗い顔をする。

○了の部屋・夜

了、日記の新しいページを開く。

テーブルで日記を書き出す。

ノート 『バスケに行った。 豆大福の差し入れ。 シュート決めた。』

ここまで書いて、手が止まる。

了、書き加える。

ノート 『嘘をついた。』

了、シャワーを浴びた後で、髪が濡れており、部屋着に着替えている。

了、しばらく、考え込む。

だが、ノートの隣に置いておいた豆大福を一口食べると、美味しさに顔がほころぶ。

了、もぐもぐしながら、しばらくノートを見て、再びペンを持ち、書き加える。

ノート 『楽しかった。』

了、豆大福の残りを一口で食べ、包装紙を捨てようと手に取る。

包装紙の影に隠れていた指輪が現れる。

了、モグモグしながら指輪を見つめて、何か思いついたように日記の前のページを確認する。

『ごみ箱の中から指輪を拾った。』を見つける。

日付は7/8（月）。

了、7/8（月）の日記を読む。

ノート 『変な人を泊めた。 学校に泊まろうとしてた。』

了、大福を飲み込み、眉をしかめる。

了 「……なんでだっけ。」 /→ブラックアウト

○大学・スカイウェイ・昼

了、黙々と掃除機をかけている。キャップを深く被り、圭二と雅樹に気づかれないようにしている。

テロップ：「Thursday」

3、4人の学生が通り過ぎると、その度に顔を隠すような仕草を見せる。

学生 A (O.S.) 「あれ？お前？」

了、学生の声に驚き、反射的に声の方を振り向く。

声の主は見知らぬ学生。一人がもう一人の学生のもとに駆け寄っていく。

学生 A 「何お前、髪染めたの？～（なんやかんや、アドリブ）」

了、動揺するも、顔をまた下に向け、黙々と掃除を続ける。

○同・C-201・昼

宏太、圭二、雅樹、黙々とパソコンを作業している。

宏太、作業しているように見せかけて、Wordのページを開いたまま手が止まっており、

圭二、白目を剥きながら寝ている。

雅樹、黙々と淡々に作業する。

雅樹 「できた。」

宏太、反射的に雅樹の声に反応する。

宏太 「嘘でしょ、待ってもしかして終わったの。」

雅樹 「うん。」

宏太 「え、まじかよ、俺あと600字残ってんだけど。」

雅樹 「600ならいけるよ。」

圭二、白目ヘッドバンキングしだす。

雅樹、財布と飲み終わったペットボトルを持って立ち上がる。

雅樹 「なんかいる？」

宏太、画面から目を離さずに答える。

宏太 「コーヒーで。」

雅樹、歩いていく。

○同・C棟自販機前・昼

了、自販機そばのゴミ箱にごみ収集カートを押してやってくる。

ゴミ袋の口に手を掛ける。

× × × フラッシュ × × ×

<回想>

圭二 「あ、てか高野さん、3年生ですか？ゼミどこっすか？」

了 「…違う、大学なんだよね…。」

× × ×

了、一つため息をつき、ゴミ袋を縛ろうとする。

学生 B (O.S.) 「すみません、これもいいですか。(空のペットボトルを差し出す手)」

了 「あ、はい。」

了、反射的に返事をして、振り向くと、学生 B は雅樹。

了 「!!!」

雅樹 「…。あの、ごみ。」

了 「…ああ！はいっ。」

了、空ペットボトルを受け取る。

雅樹、了に反応せず、自販機にお金を入れ始める。

了、戸惑いながらも、自分だとバレていないのではと思い、さっさとゴミを回収してその場を離れようとする。

雅樹 (O.S.) 「高野っちだよね。」

了、動きが止まり、恐る恐る振り返る。

雅樹、了のことを澄んだ目で見ている。

雅樹 「ごめん気付いてた。」

○同・C棟自販機横の広場・昼

了、雅樹、横に並んで座っている。

雅樹、買ったての飲み物を口に運んでいる。

了、気まずそうに左手首の時計を右手でいじりながら、頻繁に瞬きする。

雅樹 「初見から清掃の人だって気付いてたよ。」

了 「…え？」

雅樹 「別に嘘つかなくて良かったと思うけどね。」

了 「…。」

雅樹 「まあ、なんか面白そうだし、宏太と圭二にバレないように二人で口裏合わせでもする？」

了 「え。」

雅樹 「別に高野っちが言いたくないなら、俺は協力するよ。」

了 「…あ、ありがとう…。……あ、でも、宏太は知ってるんだ。」

雅樹 「そうなんだ。」

了 「うん…。」

しばしの沈黙。

了、ソワソワして、今度は手を両ポケットに突っ込む。

雅樹 「きっかけは？」

了 「え？」

雅樹 「宏太と知り合ったきっかけ。」

了 「ああ、えっと…。」

× × × フラッシュ × × ×

<回想>

宏太 「俺が学校に泊まろうとしたこと、誰にも言わないでください。」

「誰にも言わないでください。」

「誰にも言わないでください。」…（反芻する）

× × ×

了、考え込んでいる。

雅樹、了の返答の遅さを疑う。

雅樹 「どした？」

了、ハッとする。

了 「…えっと。…」

左ポケットの中で動く了の手。

了の閃いた顔。

了 「！！あっ落とし物、落とし物拾った！」【* 2】

雅樹 「…ふーん。」

○同・トイレ前の廊下・昼

圭二、小走りでルンルンしながら廊下を走ってくる。

圭二 「トッイレー、トッイレー♪」

圭二、向かいからまるで原始人のように背を丸めて歩く司の姿を見つける。

圭二 「あっ。」

圭二、足を止め、顔を歪めて司を凝視する。

司、圭二の横を通り過ぎる。

圭二、司を目で追った後、首を傾げて、トイレに向かおうとする。

すると司、物凄い勢いで来た道に戻り、再び圭二の横を通り過ぎる。

圭二 「ええ…！！ 怖っ！…え????？」

圭二、自分がトイレしたかったことも忘れ、今の出来事に挙動不審になる。

数秒後、宏太、圭二の背後側からやって来る。

宏太 「俺もトイレするー。」

圭二 「あ！え、宏太さん今見ました？やっぱやばい人ですわ、あの人。」

宏太 「ん？誰。」

圭二 「いや、ほらあれ！」

圭二、司の方を指示するも、司の姿はもう無い。

圭二 「ええ！！？…え？ 幻覚？」

宏太 「お前寝ぼけてんじゃねーの。」

宏太、圭二の方を叩き、トイレに入っていく。

圭二、納得いってなさそうに宏太の後を追って入っていく。

トイレの面する廊下の曲がり角、誰かに追われ間一髪で逃げ切ったかのように、壁に背をもたれ掛け、呼吸を落ち着かせる司の姿。

○同・C棟自販機横の広場・昼

了、雅樹がいなくなった後もそのまま座っている。

眉をしかめ、一点をただ見つめている。

ゆっくりと左ポケットから指輪を取り出し、見つめる。【* 2】

廊下から学生の集団がやってくる。

了、気持ちを切り替え、ポケットに指輪を戻し、ごみ収集カートを押して歩いて行く。

○同・体育館前・昼

了、エレベーターからカートを押して降りてくる。

カートを体育館前の階段の脇に留め、気怠そうに階段を降りて、体育館へ入る。

○同・体育館内・昼

了、誰もいない体育館に入ってくる。

入り口付近のゴミ箱からゴミを回収し、体育館から出ようとする。

宏太、バスケットボールを持ちながら体育館に入ってくる。

宏太 「お！了じゃん、お疲れ。」

了 「おお、お疲れ様。」

宏太、ゴミ箱のそば辺りにリュックを置き、その場に座る。

了 「あれ？一人？」

宏太 「おう、雅樹と圭二、今日バイト。あ、なんか圭二さっき高野さん見習ってバイトガチ勢になるとか言ってたわ（笑）。」

了 「ええ…（笑）」

宏太、リュックから飲み物を取り出す。

宏太 「あとさ、雅樹に俺らが知り合ったきっかけ？聞かれたでしょ。」

了 「ああ…うん。」

宏太 「落とし物拾ってもらったんでしょ？って言われて何の事かと思ったわ。

（笑）。…でも、ありがとな、はぐらかしてくれて。俺が誰にも言うなっていったからでしょ？」

了、満更でもない顔で鼻を触り、手に持ってたゴミ袋を一旦置く。

了 「あ、あのさ。その事なんだけど、本当はなんで学校に泊まりたかったのか…聞いてもいい？」

宏太 「え？…あー、大したことじゃねえよ、別に。（笑）」

了 「あ、いや、言えなかったら全然いいんだけど…ごめん。」

宏太 「いや、そうじゃなくてさ、本当にしょうもないことで（苦笑）」

宏太、言葉を選びながら話し出す。

宏太 「…やあー、俺実家暮らしでさ、弟と妹と全部で4人もいんのよ、6人家族。まあ、それはいいとして（笑） ……ばあちゃんがさ、去年亡くなって、俺に形見を残したんだよ、大事なときに…。」

了 「うん。」

宏太、了の顔を一度見て、鼻で笑い、頭を搔く。

大きく息を吸い、吹っ切れたように続ける。

宏太 「ま、それを捨てたと言っちゃった訳ですね。」

了 「…え？」

宏太 「母さんに無くなってること気づかれて、捨てたって言ったら大噴火

（笑）。 まあ、それで？あの日帰る家が無かったって言う…。」

了、瞬きが多くなる。

了 「……なんで、捨てたの？」

宏太、この話を避けたように、適当に答える。

宏太 「え？あー、いろいろ？（笑）」

宏太、座りながらボールで遊び出す。

了 「…その形見って、何だったの？」

宏太、ボール遊びを止めることなく答える。

宏太 「え？あー、……ゆびわ。」

了 「…指輪…。」

了、察する。眉をしかめ、瞬きがより強くなる。

了、ポケットに手を入れ、中で指輪を掴む。

宏太の前行き、指輪を見せる。

了 「もしかして、これ？」

宏太、指輪を見て表情が曇る。

宏太 「え、なんでお前が持ってんの。」

了 「…拾った、ゴミ箱の中から。」

宏太 「…え？（苦笑）」

了 「……いや、誰かの大事なものなんじゃ無いかと思って……。」

宏太、了から目線を外し、鼻で笑う。

宏太 「ふっ……そっか…。」

宏太、開きなおったように話し出す。

宏太 「……要らないもんもらった時がさ、一番困るよな。 …それだよ、ばあちゃんの形見。」

了、少しイラついてくる。

了 「え、……え、別に捨てなくてもよかったんじゃないの。」

宏太 「なんで？」

了、今までに見たことない宏太の冷たい表情に恐れる。

宏太 「貰ったものってさ、貰った人の自由だろ。だから捨ててもいいんだよ、どんなもんでも。」

了 「……え、え、でも、これきっと大事な物だったんじゃないの？」

宏太 「…。」

宏太、了の目を見ずに答える。

宏太 「要らないもんは捨てるだろ。」

宏太、ボールを持って立ち上がり、了の目の前で言う。

宏太 「それ、捨てといて。」

宏太、ドリブルしてゴール下に行き、一人でバスケットをします。

了、しばらく呆気に取られる。

我に返ると、決まり悪そうに素早くゴミを持ち上げて、体育館から去っていく。

宏太、了には目もくれず、黙々とバスケットをする。

○同・スカイウェイ・昼

了、ごみ収集カートを押して長い廊下を歩いてくる。(デザイン実習室方面へ)
だんだんとカートを押す足が早くなっていく。

了、いつもなら立ち止まっている、ダンス君が見えるスポットを通り過ぎる。
ダンス君、いつも通り踊っている。

○同・ロッカールーム・夕方

ロッカーを開ける了。少しイラついている。

ロッカーの中には、缶コーヒー。

いつも以上に長く、そして怪訝に缶コーヒーを見つめる。

了、怪訝な表情のまま、着替え出す。

○同・C-101・夕方

かおり(20)、小走りで教室に入ってくる。

かおり 「司一、帰ろー！！」

かおり、入ってすぐ、怪訝な顔をする。

教室の中で一人、土下座のような体勢になっている司の姿。ただ、頭だけは目線が地面に対して平行になるような角度になっている。

かおり 「いや、もう、諦めなよー。」

司、気にせずその体勢を続ける。

かおり 「もう正直に伝えたら？」

司 「まだ諦めないー！！！」

かおり、入り口の壁に寄りかかって、司の様子を呆れ顔で見る。

かおり 「……あ、てかさ、聞いてみたらいいんじゃない？」

司、顔をかおりの方へ向ける。

かおり 「うーん、…あれ、なんていうだ、あーゆう人……………ほら、」

司の？な表情。(かおりの発言に対しての表情)

○同・C棟階段向かいの談話室(指輪を拾ったところ)・夕方

着替え終わった了、指輪を拾ったゴミ箱の前に立っている。

了、ポケットから指輪を取り出す。
しばらく指輪を見つめる。
決心したように、一つため息をつく。

ゴミ箱から立ち去る了の後ろ姿。

○了の部屋・夜

新しいページが開かれている日記。既に『7/11（木）』と書かれている。
了、ソファに背を持たせかけ、テーブルに両腕をのせた状態でペンを回している。
目は日記を向いているが、焦点が合っていない。
ペン回しが止まる。
了、目線だけを動かし、小さな台の上に置いている父との写真と、父の形見の腕時計を見る。(いつも了が付けている腕時計)
了、意を決したように何かをノートに書き込む。【* 3】

○大学・体育館・昼

ドリブルされているバスケットボール。
テロップ：「Friday」
宏太、一人でバスケットをしている。体育館には他に誰もいない。
ゴールに対して正面のスリーポイントのところからゴールを狙う。シュートする。
かすりもせず落ちていくボール。
宏太、ひとつため息をつき、頭を搔く。

○同・スカイウェイ

談笑しながら歩く学生たち。
キャップを被った了、学生たちを横目に、気配を消して掃除機をかけている。
掃除を終え、片付けに行く。／→フェードアウト

○同・3年アトリエ

了、ごみ収集カートを押しながらアトリエに入って行く。
ゴミが溜まった袋の口を結んで、回収する。
↓ワイプ

○コンピューター室

↓

○デザイン実習室

↓

○4年空間アトリエ

↓

○トイレ横

↓

○C-102

了、同じように回収する。

○同・C-301

了、ごみ収集カートを押しながら教室に入って来る。

入り口から3メートルほど中に入った所にあるゴミ箱まで直行する。

いつものようにゴミを回収し、部屋を出る。

○同・C棟階段向かいの談話室・昼

了、カートを押して入ってくる。

談話室には、司ともう1人学生が座っている。(司のテーブルにはカレーが。)

了、ごみ箱付近でカートを止め、ゴミを回収し始める。

司、了が来たことに気づき、目を丸くする。

司 「あの！！」

了、司のあまりの大きな声に、驚き、振り向く。

司、素早く椅子から立ち、了に駆け寄る。

司、何かに迫られているような、すごいアドレナリンで了に尋ねる。

司 「あの！！思い出したんです。私、きっと、ここで指輪落として、知りませんか????!!」

了 「え？」

司、まくし立てる。

司 「あの、なんか、レトロで、琥珀色の宝石のついた、素敵な指輪なんですけど、拾ったり、見たりしてないでしょうか????ここも何度も探したんですけど、今思い出して！絶対ここだって、ここで一回はずしたんだって！」

了 「……え、……え？ え、指輪って、あの…茶色の……？ なんか、周りもなんか銀の装飾みたいな…」

司、食い気味に答える。

司 「そう！！！！！！！！それです！それです！！あ、あの、どこにありますか??」

了、頭が混乱し瞬きが多くなる。

了、混乱したまま自信なさそうに司に尋ねる。

了 「…え、え？…え、あれ、…宏太のじゃ、ないんですか…？」

司、目を見開く。

司 「お友達ですか!？」

了 「……ま、まあ。」

司 「じゃあ、言ってもいいのかな…。 プレゼントしてくれたんです！私に！」

了、思考が停止する。

了 「…プレゼント？」

司、今にも泣きそうに説明する。

司 「なんでもおばあさんの形見らしくって、なのに私、無くしちゃって（泣）…すごい嬉しかったから、付けてるところを見せて、ちゃんとお話しようと思ってたのに、もう、私申し訳なくて、顔向けできなくて、お話どころか避けちゃって（泣）…だから！捨てて頂けているのなら本当に本当にありがたくて、」

了、司を制する。

了 「ちょっ、ちょっと、待って、ください。……え、…え？」

司、不安そうな顔になる。

了、深く眉をしかめ、今までのことを思い出す。

× × × フラッシュ × × ×

<回想>

宏太 「……ばあちゃんがさ、去年亡くなって、俺に形見を残したんだよ、大事なときに一って…。」

「大事なときに一って…。」

「大事なときに一って…。」（反芻する）

宏太 「何でお前が持ってんの。」

宏太 「要らないものもらった時がさ、一番困るよな。」

宏太 「貰ったものってさ、貰った人の自由だろ。だから捨ててもいいんだよ、どんなもんでも。」

宏太 「要らないもんは捨てるだろ。」

× × ×

了、事が分かり、宏太の発言の意味と理由に気づく。

了、自分が指輪を宏太に見せたことで誤解を招いていることに気づく。《♪スタート》

いてもたってもいられなくなり、走り出す。

司、驚き、了の行先を見つめる。

了、走っていく。

○了の部屋・夜（7/11）＜回想＞

了、意を決したように何かをノートに書き込む。【* 3】

<ここから続き>

ノート 『俺は捨てない。』

書き込まれたノートの先、テーブルの端に指輪が置いてある。

○同・スカイウェイ・昼

走る了の姿。

《♪エンドロール》

<エンドロール明け>

○大学・C棟談話室・昼

テーブルに置かれた、欧風カレー。（他にも筆箱、ノート、ティッシュが置かれている）

司、満面の笑みを浮かべる。

司 「いただきます！」

司、食べようとする、指輪をはめていることに気づく。

大事そうに指輪を外し、大事そうにティッシュで包んでカレーの隣に置く。

司、「汚れちゃいけない♪」

○同・廊下・昼

かおり、忙しく、キョロキョロと司を探している。

かおり、友人を見つけ、声をかける。

かおり 「司知らない？」

○同・C棟談話室・昼

司、最後の一口を頬張る。

かおり（O.S.） 「つかさー！」

かおり、勢いよく走ってくる。

司、おとぼけ顔。

司 「どしたの？」

かおり、息を切らし、眼光鋭く答える。

かおり 「今日、佐々木先生の、手伝って、言ったよね？」

司、大きく目を見開く。

司 「ああああ！！そうだった！！」

かおり 「ちょっと、もういい、いいから早く手洗ってきて、私片付けとくから。」

司、慌てて手を洗いに行く。

かおり、テーブルの上のものを司のリュックに詰め込む。

司のリュックを前側に背負い、テーブルのカレーの容器とティッシュを乱雑に一気に持って、ゴミ箱へ捨てる。(→ティッシュと共に捨てられた指輪)

司とかおり、慌てて佐々木の元へ向かう。(アドリブで、急ぎの台詞)

悲しげに佇むゴミ箱の姿。

テロップ：「5days Side Story」

≪エンドロール 続き≫

・バスケを楽しむ4人の姿(了、宏太、雅樹、圭二)

※ダンス君のダンスシーン(カメラワーク駆使したやつ)撮る

→オープニングかエンディングで使用する

完